

西トップ遺跡の修復

—中央祠堂屋蓋部の再構築—

1 はじめに

奈文研によるこれまでの修復の経緯と経過 奈文研はカンボジアの内戦終結直後の1992年よりアンコール遺跡に携わる人材養成を見据えたアンコール遺跡の調査と保全活動に着手した。2002年より西トップ遺跡の調査を現地の文化財保護機関であるアンコール地域遺跡保護整備機構（APSARA）と共同で開始し、2011年からは調査修復とそれに伴う発掘調査を進めている。

西トップ遺跡は王都アンコール・トムの南西区画にあり、その中心寺院であるバイヨンから西南西500mほどに立地する寺院遺跡である。西トップ遺跡は、中央祠堂・南祠堂・北祠堂が東を正面として一列に並び、中央祠堂の手前には東テラス（仏教テラス）が接続しており、これらすべての構造物を囲む結界石とラテライト石列によって寺域が形成されている（図14）。

南祠堂の修復 三祠堂の修復は2011年に南祠堂から着手した。南祠堂は、躯体部・上成基壇・下成基壇からなる。屋根にあたる屋蓋部は失われ、躯体部は南に約19度傾いていた。修復調査のため、南祠堂の解体をおこなったところ、下成基壇最上面は砂岩敷石面であったが、不等沈下を起こしていた。この敷石面を解体し、基壇土の発掘調査をおこなうと、基壇土内から中央祠堂の階段が発見された。これにより南祠堂は中央祠堂構築後に、その南に接続する形で建立されたことが判明した¹⁾。

北祠堂の修復 北祠堂は中央祠堂の北側に建てられ、南祠堂と同様の構造をしているが、南祠堂より崩壊が進

行していた。解体調査を進めていくと、北祠堂も中央祠堂より後に建立されたことが判明した²⁾。さらに北祠堂の下成基壇の調査を進めていたところ、基壇直下に地下室状のレンガ造遺構が発見された。当遺構下半部は特に強く被熱し、遺構の底約10cmに炭化物が多く混入する遺物層があり、金製品、青銅製品、ガラス小玉、水晶、焼骨片をはじめとした遺物が出土し、これらの遺物のほとんどに被熱痕跡が認められた。検出された遺構・遺物の状態から判断して、何らかの火を伴う行為が当レンガ造遺構においておこなわれた可能性が考えられた。このレンガ造遺構では出土遺物と同一層より多くの炭化物が出土したため、放射性炭素年代測定法による年代測定の結果³⁾、14世紀初頭から15世紀前半の年代値が得られた。レンガ造遺構は埋土の状況から火を伴う儀礼がおこなわれた後、長期間にわたり自然堆積したものではなく、一気に砂で埋め、その上に北祠堂の基壇、躯体部と構築していくものと考えられる。

中央祠堂の修復 中央祠堂は高さ約8mを測るが、かつて中央祠堂の頂部に木が生えており、その樹根によって屋蓋部が大きく倒壊していた（図15）。中央祠堂は特徴的なことに、砂岩外装の内側に前身遺構となるラテライト基壇が存在しているが、修復にあたっては当該のラテライト基壇は最低限の部分的な補修にとどめた。その後、基壇の砂岩外装と躯体部の再構築をおこなった。

2 2023年度の修復

中央祠堂修復の完了 2022年度末までに中央祠堂躯体部の修復を終え、2023年度はペディメントを含む屋蓋部の修復をおこなってきた（図16）。第15層から第8層にあたる第1ペディメントの再構築完了および、第7層から



図14 三祠堂修復後俯瞰写真（上空から、上が北）



図15 三祠堂修復前（東から）



図16 中央祠堂再構築作業風景（北東から）



図17 三祠堂修復後（東から）



図18 中央祠堂修復後（東から）



図19 東テラス南壁修復中（南東から）

第1層にあたる第2ペディメントの各4面について、フランス極東学院による古写真を参考に、現地周辺の石材探索によって発見された石材と一部新材を組み合わせて再構築した。なお、第2ペディメントより上層はほとんどを新材による再構築とせざるを得ないため、再構築は第2ペディメントまでで完了とした。2023年12月には予定していた第2ペディメントまでの修復を終え、2011年以降13年におよんだ三祠堂の修復が完了した（図17・18）。

東テラス東端部の沈下状況　東テラスの東側、階段部以東が沈下していることは以前から指摘されていた⁴⁾。現状を確認するため、第17次調査時に東テラス上の現地表面および周辺のレベルを計測したところ、東テラス南東に位置する階段部で、東テラス西端の地覆石と比べ約30cmの沈下が認められた。2024年度以降の修復を見据え、2023年8月に実施した第17次調査では東テラス上の階段部西端までの下層ラテライト石列を確認した。第17次発掘調査の詳細については本書4～7頁の発掘調査報告を参照されたい⁵⁾。

東テラス南北壁の修復　中央祠堂屋蓋部修復後、2024年1月より東テラスの南側側石・延石及び側石下層ラテライト基礎石列の修復をおこなった（図19）。この際、北側ラテライト基礎石列と同様に、東テラス南側においても現在の砂岩地覆石と下層のラテライト基礎石列の位置が一致することが確認された。修復にあたっては、側石および延石の現位置を記録しながら解体し、ラテライト基礎石列下の地盤をつき固めてレベルを揃えたのち補修

石材と一部新材を用いて全体を再構築した。

3まとめ

2023年末に三祠堂の修復が完了し、本稿執筆中の2024年2月末の時点で東テラスの東張り出し部を除く修復がおおむね完了した。西トップ遺跡の修復調査は2024年度より、修復を主とする活動から、これまでの発掘調査の整理作業及び整備公開へと軸足を移していくことになる。今後、東テラス東張り出し部の発掘調査、沈下部の嵩上げと修復、出土遺物目録の作成、ガイダンス施設の設置などを予定している。

（西原和代・佐藤由似・笠原朋与・Lam Sopheak）

註

- 1) 奈文研『西トップ遺跡調査修復中間報告1』18-20頁、2014。
- 2) 奈文研『西トップ遺跡調査修復中間報告4』6頁、2017。
- 3) 米田穂・大森貴之・尾寄大真・佐藤由似・杉山洋「西トップ遺跡北祠堂レンガ造構から出土した炭化物の放射性炭素年代測定」奈良文化財研究所『西トップ遺跡北祠堂修復報告5』20-23頁、2018。
- 4) 奈文研『西トップ遺跡調査報告』学報88、33頁、2011。
- 5) 大林潤・西原和代・杉山洋「西トップ遺跡の調査－第17次発掘調査・2023年度建造物調査－」本書4-7頁。

参考文献

佐藤由似「カンボジア・シェムリアップ州 西トップ遺跡」『考古学研究』279、考古学研究会、2023。